

令和2年度 東中学校のあゆみ —結果概要とその分析から見えてきた成果・課題と今後の取組について—

大阪市教育委員会では、保護者や地域の皆様に説明責任を果たすことが重要であると考え、より一層教育に関心をお持ちいただき、教育活動にご協力いただくため、学校が各調査の結果や各調査結果から明らかになった現状等について公表するものとしています。

本校でも、各調査結果の分析を行い、これまでの成果や今後取り組むべき課題について明らかにし、本市教育委員会の方針に則り公表いたします。

なお、本調査により測定できるのは、学力の特定の一部分であり、学校における教育活動の一側面に過ぎません。

1-1 「中学生チャレンジテスト」の調査の目的

- (1) 大阪府教育委員会が、府内における生徒の学力を把握・分析することにより、大阪の生徒課題の改善に向けた教育施策及び教育の成果と課題を検証し、その改善を図る。加えて、調査結果を活用し、大阪府公立高等学校入学選抜における評定の公平性の担保に資する資料を作成し、市町村教育委員会及び学校に提供する。
- (2) 市町村教育委員会や学校が、府内全体の状況との関係において、生徒の課題改善に向けた教育施策及び教育の成果と課題を検証し、その改善を図るとともに、そのような取組を通じて、学力向上のためのPDCAサイクルを確立する。
- (3) 学校が、生徒の学力を把握し、生徒への教育指導の改善を図る。
- (4) 生徒一人ひとりが、自らの学習到達状況を正しく理解することにより、自らの学力に目標を持ち、また、その向上への意欲を高める。

1-2 「中学生チャレンジテストplus」の調査の目的

- (1) 生徒及び保護者が、学習理解度及び学習状況等を知り、目標をもって主体的に学習に取り組めるようにする。
- (2) 学校が生徒一人ひとりの学力を的確に把握し、学習指導の改善及び進路指導に活用する。
- (3) 学びの連続性を確立する観点から、客観的・経年的なデータを把握、分析し、効果的な指導方法や課題を「見える化」し、その改善に役立てる。

1 中学生チャレンジテスト・中学生チャレンジテストplus

学年 実施月日		生徒数 (人)	平均点(点)					平均無解答率(%)				
			国語	社会※	数学	理科※	英語	国語	社会※	数学	理科※	英語
1 年	学校	186	61.2	65.0	65.5	75.2	75.8	10.4	1.4	5.1	1.9	1.8
	大阪市	—	55.1	56.2	53.3	65.6	62.7	12.4	4.5	8.0	3.0	3.1
1月13日	大阪府	—	56.1	—	54.0	—	63.8	12.7	—	8.7	—	3.3
2 年	学校	180	67.3	59.7	59.1	55.0	58.9	7.2	3.7	5.5	3.6	3.2
	大阪市	—	57.1	55.2	49.3	49.8	51.7	10.6	5.5	9.4	5.4	4.8
1月13日	大阪府	—	58.3	54.5	49.4	49.5	52.0	10.1	5.8	10.0	5.8	4.8

※ 1年生の社会・理科については、「中学生チャレンジテストplus」として実施

※ 1年生の理科は 粒子 領域を選択

※ 2年生の社会は A 問題を選択

令和2年度 大阪市立東中学校のあゆみ —結果概要とその分析から見えてきた成果・課題と今後の取組について—

調査結果から 中学生チャレンジテスト（2年生）

【成果と課題】

<国語>

国語の平均点を見ると、67.3点と大阪府平均を9.0点上回った。

分類別に得点率を大阪府平均と比較して詳細をみていくと、次の通りである。

「学習指導要領との関連」の分類では、「話すこと・聞くこと」の区分で1.6ポイント、「書くこと」の区分で4.2ポイント、「読むこと」の区分で2.5ポイント、「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」の区分で2.3ポイント上回っている。全項目で大阪府平均を上回った。

「評価の観点」の分類では、「話す・聞く能力」の区分で1.6ポイント、「書く能力」の区分で4.2ポイント、「読む能力」の区分で2.5ポイント、「言語についての知識・理解・技能」の区分で2.3ポイント、全項目で大阪府平均を上回った。

「問題形式」の分類では、「選択式」の区分では4.7ポイント、「短答式」の区分では3.0ポイント、「記述式」の区分では1.3ポイント、全項目で大阪府平均を上回った。

以上のように、すべての分類、区分において大阪府平均を上回るという結果になった。

<社会>

本年度の中学生チャレンジテストにおいて、社会の学校平均点は大阪府の平均54.5点よりも5.2点高い、59.7点であった。得点の人数分布をみると、大阪府全体・東中学校の分布の割合のピークは同じであったが、全体的に高い得点側に偏っており、それが平均点の底上げになっている。また、85～89点の分布が多くなっており、得点力が高い生徒が多いことがわかるが、15～19点の割合も府平均よりも多い数値となっていることは課題である。

領域別にみた平均点では、地理的分野・歴史的分野ともに大阪府の平均点を上回っており、領域の違いによる平均点の偏りはみられなかった。また、観点別にみた平均点でも、3観点とも大阪府の平均を上回っている。さらに、問題形式別の平均点でもすべての形式で大阪府平均を上回っている。

<数学>

大阪府平均と比較すると、本校の平均点は59.1点で9.7点上回っていた。

「数と式」の領域では、平均点が23.6ポイント（大阪府平均より4.2ポイント上）となり、基礎的・基本的な計算の技能は身につけていると考える。その他の領域については「図形」の領域で17.6ポイント（府平均+2.6）、「関数」の領域で17.9ポイント（府平均+2.9）と全領域において上回る結果となった。

<理科>

本年度の中学生チャレンジテストにおいて、理科の学校平均点は、大阪府の平均 49.5 点よりも 5.5 点高い、55.0 点であった。得点の人数分布を見ると、大阪府全体では 30～34 点に人数分布のピークがあり、そこから徐々に下がっていく傾向がある。これに対して、東中学校の人数分布では 30～34 点のピークから徐々に下がるが、70～79 点あたりにもう一つのピークがあり、学校平均を引き上げている。また 0～14 点の層に当てはまる生徒がほとんどおらず、中央値が 52.5 点と大阪府の平均値より高い。

領域別では、2 領域とも大阪府の平均点を上回っており、大阪府と同様に生物的領域が化学的領域より上回っている。観点別でも、3 観点ともに大阪府の平均点を上回り、自然事象についての知識・理解が大阪府の平均より特に高かった。また、問題形式別でもすべての形式において大阪府の平均点を上回っており、選択式はもちろん、短答式でも得点率が高かった。

本校の平均点が大阪府の平均点を上回っていることや、29 点以下の層の人数が少ないことから、基礎的な学習の定着がはかれていると思われる。基礎学力の定着に向けて授業中に行った演習プリントや単元ごとの小テストなどの成果であると考えられる。ただ得点の人数分布において 29 点以下の層に分布する生徒 (12.8%) は、理科に苦手意識を持っていると考えられる。この層の生徒に興味関心をもって学習に取り組めるように、教材を工夫していく必要がある。

<英語>

本年度のチャレンジテストにおいては、大阪府の平均が 52.0 点であったのに対し、本校は 58.9 点と大阪府平均よりも 6.9 点上回っている結果となった。

「聞くこと」の領域においては、1.8 ポイント上回ることができた。C-NET との授業はもちろん、英語による指示を今まで以上に増やし、リスニングテストを集中して実施することで聞き取りの力がある程度定着してきたからだと考えられる。

「読むこと」の領域においては、4.5 ポイント上回ることができた。本文についての口頭質問に答える、指示語についての説明を多く授業に取り入れていることで、文章を読み取る力が少しずつではあるがついてきているという結果に結びついた。

「書くこと」の領域においては、1.0 ポイント上回った。単元ごとの単語テストでは新出単語のチェックだけではなく、連語や基本文を応用した並べ替え問題も実施しているため、基本文の定着が図られたのではないと思われる。しかし、記述式の無回答率は約 10% と高く、授業の取組の中で英作文に取り組む時間数が少ないことが原因であると思われる。

得点の人数分布を見ても、35 点以下の生徒の割合は約 10% であり、大阪府平均を大幅に下回っている。そこから全体的にある一定の点数はとれていることがわかる。また、35～54 点の生徒は大阪府平均を大幅に下回っているが、それでも約 40% の生徒が平均点を取れていないという結果になった。ただ、無回答の割合は全体的に大阪府平均よりも少なく、あきらめずに答えようという意欲は見られる。

【今後に向けて】

<国語>

今回のチャレンジテストの設問別集計をみると、32 項目のうち 30 項目で大阪府の平均を上回っている。これは、普段から継続して取り組んでいる漢字の書き取り学習や、集団に応じて作成しているプリントを用いた授業を意識し続けた成果である。さらに、授業で学んだことを自分の言葉で表現したり他人に伝えたりすることを書くことを授業に意識して取り入れたこともその成果につながったと考えられる。今後も教材を工夫しながら継続したい。

また、生徒の「わかる」「やりきった」という喜びにつながる授業を展開するために、興味・関心を持たせる導入の工夫や I C T の活用をより図っていく。

今後は意見を共有することの楽しさに気づかせ、自分の考えや意見を表現することの苦手意識をなくし、学びをより深めさせたい。そのためには、グループワークやペアワーク等、生徒が主体的・対話的に取り組める授業を創造する。その一方で、習熟度別授業の充実や、きめこまやかな指導、個に応じた指導などを行うことで、生徒のさらなる学力の向上に努めていく。

<社会>

各領域、観点、問題形式とも、大阪府の平均を上回ることができた。日頃から社会事象に興味・関心を持てるよう、授業の導入に時事問題についての話題を指導したこと、またテスト前の振り返りプリントなどで学習を積み重ねてきた成果と考える。今後も今回のテスト結果を現状維持するとともに、得点割合の分布の 15～19 点の分布を減少させ、理解度が深まる授業をめざしていきたい。

<数学>

アンケート結果から「授業中、自分の考えや意見を伝える場面がある」「授業中、話し合う活動を通じて自分の考えを深めたり、広げたりしている」の 2 項目について、「当てはまる・どちらかといえば当てはまる」と肯定的に回答した生徒の割合が 87.2%、82.8%と府平均をそれぞれ 1.9 ポイント、2.9 ポイント上回った。

チャレンジテストの結果から、生徒の多くは授業を理解し、基礎的・基本的な内容は身につけている。しかし、記述式の問題については、大阪府平均を 0.7 ポイント上回っているものの、本校の平均点は 3.2 ポイントと低い結果であった。そのため、数学を用いて理解し、説明する力の育成が必要である。言語活動を取り入れた授業展開で、思考力・判断力・表現力の育成に努めたい。

<理科>

本年度は新型コロナウイルス感染症の影響で、グループワークや実験・発表がほとんど実施できなかったことが原因で、実験・観察の技能の正答率が大阪府の平均にとどまっていると考えられる。この影響は今後も続くと考えられるので、I C T 機器の積極的な活用を進めていかなければならない。全体的には基礎学力は定着していると考えられるが、今後も單元ごとの演習プリントや小テストを実施し、さらなる定着をめざす必要がある。特に記述式に苦手意識を持っている生徒に対して興味関心をもって学習に取り組めるように、教材を工夫し、演習や討議・発表の機会を多く持つ

ことが必要である。

<英語>

大阪府平均を上回ったとはいえ、大幅には変わらないという結果であったため、さらに実力を伸ばすよう授業に集中して臨み、さらに基礎力を応用力につなげられるように今後の授業構成を考える必要がある。

特に「書くこと」では、自由英作文に取り組むための前段階として単語テストや課題作文などを授業中に実施し、家庭学習として自由英作文に取り組むなど、日常的に英語を書く機会を増やそうにしていける。自分の意見を英語にすることとその意見をまとめる力が必要になるため、必要な単語や連語の定着を図り、英文作成が大きく負担になることのないよう、パターンを繰り返し練習することで、少しずつ長い文章へと移行していくように指導の体制を整える。

また、「聞くこと」においては、授業中の単語や本文の聞き取り、音読や定期テストでのリスニングだけにとどまらず、音楽などを用いての単語のリンキングにも取り組む。また、授業中でのリスニングテストやC-NETとのやり取りを増やせるような取組もすすめる。さらに、実際に聞くだけではなく英語を使って会話をすることで、集中して聞き取ろうという意識を高めていく。

今年度、意欲的に授業に取り組む姿勢は見られたが、苦手意識を持っている生徒も多い。今後は自分たちで考えを深め、発信できる授業につなげられるよう、少人数授業やTT授業を活用し、生徒の学力向上に努める。

令和2年度 大阪市立東中学校のあゆみ —結果概要とその分析から見てきた成果・課題と今後の取組について—

調査結果から 中学生チャレンジテスト・チャレンジテスト plus（1 年生）

【成果と課題】

<国語>

国語の平均点を見ると、61.2 点と大阪府平均を 5.1 ポイント上回った。分類別に得点率を大阪府平均と比較して詳細を見ていくと、次の通りである。

「学習指導要領との関連」の分類では、「話すこと聞くこと」の区分で、0.4 ポイント、「書くこと」の区分で、1.4 ポイント、「読むこと」の区分で、1.4 ポイント、「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」で、2.5 ポイント上回っている。全項目で大阪府平均を上回った。

「評価の観点」に関する分類では、「話す・聞く能力」の区分で、0.4 ポイント、「書く能力」の区分で、1.4 ポイント、「読む能力」の区分で、1.4 ポイント、「言語についての知識・理解・技能」の区分で、2.5 ポイント上回っている。全項目で大阪府平均を上回った。

「問題形式」の分類では、「選択式」の区分では、1.5 ポイント、「短答式」の区分では、3.2 ポイント、「記述式」の区分では、0.4 ポイントと全項目で大阪府平均を上回った。

以上のように、すべての分類、区分において大阪府平均を上回るという結果になった。

<社会>

本年度の中学生チャレンジテスト plus において、社会の学校平均点は、大阪市の平均 56.2 点よりも 8.8 点高い、65.0 点であった。

領域別に見た平均点では、地理的分野が大阪市の平均 55.8 点よりも 12.1 点高い、67.9 点であり、歴史的分野が大阪府の平均 57.4 点よりも 5.6 点高い、63.0 点であった。

今後の課題としては、歴史的分野の方が、大阪市平均との差が小さいため、歴史的分野もしくは「古代までの日本」の学力の向上があげられる。

観点別に見た平均点でも、4 観点とも大阪市の平均点を上回った。資料活用の技能の観点については他の観点よりも大阪市の平均との差が大きく、授業時にたくさんの資料を提示し、考え・読み取る機会を充実させた成果が出ている。

問題形式別の平均点でも、全ての形式で大阪市平均を上回っており、記述の形式の得点が大阪市の平均 33.3 点よりも 12.9 点高い、46.2 点であった。

<数学>

大阪府平均と比較すると、本校の平均点は 65.5 点で 11.5 点上回っていた。

「数と式」の領域では、平均点（得点率）が 67.6 ポイント（大阪府平均より +11.2 ポイント）となり、基礎的・基本的な計算の技能は身につけていると考える。「関数」の領域においても 62.2 ポイント（府平均 +12.0）と全領域において上回った結果となった。

<理科>

本年度の中学生チャレンジ plus において、理科の学校平均点は、大阪市の平均 65.6 点よりも 9.6 点高い、75.2 点であった。

理科の平均正答率度数分布を見ると、人数分布のピークは大阪市全体と同様に正答率 70～79% で、大阪市全体の 21.0% を 5.7% 上回る 26.7% である。東中学校では正答率 20% 未満が 0.0% であり、さらに、正答率が 90～100% の割合が、大阪市全体は 14.3% であるのに対し、東中学校は 7.6% 上回る 21.9% であるため、学校平均を引き上げている。

理科のカテゴリー別平均正答率においても、すべての項目で大阪市全体の平均正答率を上回っている。領域別に見た平均点では、2 領域とも大阪市の平均点を上回っており、特に粒子の領域で正答率が高く、大阪市の平均より 12.8% 上回っている。観点別に見た正答率も、4 観点とも大阪市の平均点を 8.6% 上回り、特に「科学的な思考・表現」の観点が、大阪市の平均を 10.2% 上回っている。また、基礎・活用別の正答率も大阪市の平均をすべての項目で 9.5% 上回り、特に「活用」では 10.7% 上回った。問題形式別の正答率においても大阪市の平均をすべての項目で 9.7% 上回り、特に短答式では大阪市の平均を 14.4% 上回った。

アンケート結果では、「自ら課題を見つけて、家で勉強をしている。」という質問に対して、肯定的に答えた生徒が 63.8% であり、大阪市の平均を 10.6% 上回った。

<英語>

本年度のチャレンジテストにおいて、大阪府の平均が 63.8 点であったのに対し、本校は 75.8 点であり、大阪府平均より 12.0 ポイント大きく上回る、という結果となった。

「聞くこと」の領域においては、3.3 ポイント上回ることであった。C-NET との授業やリスニングテストの実施だけでなく、英検対策としてのリスニング問題の練習や、フォニックスの授業を実施することで聞き取りの力が定着し、高い「聞く力」が定着していると考えられる。

「読むこと」の領域においては、9.4 ポイントと特に大きく上回ることができた。すべての課において暗唱に取り組むこと、一定の長さの英文を読み込むことを授業に取り入れていることで、文章を読み取りの力がしっかりとついてきているという結果に結びついた。

「書くこと」の領域においては、1.1 ポイント上回った。単元ごとの単語テストを毎回実施し、C-NET を含む複数教員で添削することが基本的な「書く力」の定着の一因であると考えられる。

得点の人数分布を見ても、34 点以下の生徒の割合は 4.8% で、大阪府平均 (13.0%) を大幅に下回っている。そこから全体的にある一定の点数は取れていることがわかる。また、35～64 点の生徒は 23.6% となっており大阪府平均 (35.9%) を大幅に下回っていて、約 3 割が平均点を取れていないという結果になった。ただ、無回答の割合は全体的に大阪府平均よりも少なく、あきらめずに答えようという意欲は見られる。

【今後に向けて】

<国語>

今回のチャレンジテストでは、平均点を中心にばらつきの少ない結果ではあったが、すべての項目で大阪府の平均を上回っている。これは、普段から作品をしっかり読み、内容理解にとどまらず、文章同士の繋がりや関係性に重点を置いた授業の取組の成果である。

記述においては、作文の課題に数多く取り組み、その都度文章の型を利用したスモールステップ化を図ることで、原稿用紙を使って長い文章を書くということへの苦手意識を克服し、自分の意見や主張を楽しくわかりやすく書くという授業を今後も展開していきたい。

漢字学習においては、「言語についての知識・理解・技能」の平均点の差が最も大きかったことから、漢字を使用する意義や、成り立ち、漢字を論理的に理解する活動によって、定着が図られた成果である。今後はさらなる定着を図るため、積み重ね学習を展開していく。

今後は、新型コロナウイルスへの対策から、実施が難しかったグループワークやペアワークができる授業の検討、習熟度別授業の実践をすることで生徒の学力向上に努めていく。

<社会>

各領域・単元・観点とも、大阪市の平均を上回ることができたが、歴史的分野の平均との差が小さいため、復習や繰り返しプリントなどを用い、学習の定着を図る。

また、今後の歴史的分野の授業においても、小テストなどを実施することで、知識の定着を図り、より生徒が興味・関心を持てるような授業づくりに努める。

<数学>

アンケート結果から「授業中、自分の考えや意見を伝える場面がある」の項目について、「当てはまる・どちらかといえば当てはまる」と肯定的に回答した生徒の割合が 82.7%と府平均を 0.2 ポイント上回った。「授業中、話し合う活動を通じて自分の考えを深めたり、広げたりしている」の項目については、「当てはまる・どちらかといえば当てはまる」と肯定的に回答した生徒の割合については 75.7%と府平均を 3.4 ポイント下回った。

チャレンジテストの結果から、生徒の多くは授業を理解し、基礎的・基本的な内容は身につけている。しかし、記述式の問題については、大阪府平均を 7.7 ポイント上回っているものの、本校の平均点は 26.8 ポイントと低い結果であった。そのため、数学を用いて理解し、説明する力の育成が必要である。アンケートの結果からも言語活動を取り入れた授業展開で、思考力・判断力・表現力の育成に努めたい。

<理科>

中学生チャレンジ plus において、学校平均点が大阪市の平均点を 10 ポイント近く上回った。また、アンケート結果と平均正答率度数分布から、生徒は自宅学習と授業を結び付け、学習の定着ができていると考えられる。これは、基礎的な知識の定着に向けて、初期のころから單元ごとの演習プリントや、授業の定着度を確認するテスト（小テスト）などを多く実施してきた成果と考えられる。加えて、自然現象を論理的に説明できるよう、授業の中で学習内容や実験結果を文章化したり、対話・発表したりする機会を設けていることが、「活用」の正答率や「科学的な思考・表現」の観点の正答率に繋がっているのではないかと考えられる。

今年度、コロナウイルス感染拡大防止対策下において、実験・観察の機会をもつことが難しくなったにもかかわらず「観察・実験の技能」の項目も大阪市平均を上回った。生徒の興味関心が高まるような動機付けと、日常生活との関連付け、実験の結果を予想したり動画で検証したりできるような工夫を行ったことが影響したのではないかと考えられる。

一方、正答率の人数分布において 65%未満に分布する生徒は、理科に対して苦手意識を持っていることが予想される。生徒が興味関心をもって学習に取り組めるような授業の導入を丁寧に行うと共に、より基礎・基本が定着するよう、教材を工夫し、確認テスト（小テスト）等で振り返る機会を設け、小單元ごとの目標達成を実感できる授業を展開していく必要があるのではないかと考える。今後は生徒が自ら、成果を実感し課題を見つけることができるよう、より一層授業を工夫していくことが重要であると考えられる。

<英語>

大阪府平均を 12.0 ポイントと大きく上回るという結果であったが、さらに実力を伸ばすために今以上に集中して授業に臨み、基礎力をつけるために繰り返して学習ができるよう、今後の授業構成を考える必要がある。

特に「書くこと」では、単語テストや本文練習用プリントなど授業中に実施できるものだけでなく、過去形を導入した後であるので、英語での日記作成や自由英作文などに挑戦するなどして、日常的に英語を書く機会を増やすようにしていく。また、英文作成が大きく負担になることのないよう、単語や熟語の定着から始め、少しずつ文章へと移行していくように指導の体制を整える。

一方、「聞くこと」においては、授業中の単語や本文の聞き取り、音読や定期テストでのリスニングだけにとどまらず、授業中でのリスニングテストや C-NET とのやり取りを増やせるように取り組む。また、実際に聞くだけではなく英語を使って会話をすることで、集中して聞き取ろうという意識を高めていく。

今年度、全体として意欲的に授業に取り組む姿勢は見られたが、苦手意識を持っている生徒も一定数存在する。その生徒達も取りこぼすことのないよう、また、今後は自分たちで考えを深めることができる授業につなげられるよう、少人数授業や TT 授業を工夫し、生徒の学力向上に努めていく。